

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12351

研究課題名（和文）オーストラリアにおける「ボートピープル」の脱/安全保障化をめぐるポリティクス

研究課題名（英文）The politics of securitization and desecuritization of "boat people" in Australia

研究代表者

飯笹 佐代子 (Iizasa, Sayoko)

青山学院大学・総合文化政策学部・教授

研究者番号：30534408

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：豪州における庇護希望者の密航を阻止するための境界政治について、歴史的背景や国境管理、国外収容の実態などに着目しながら明らかにした。また、マヌス島（パプア・ニューギニア）に収容された庇護希望者らが、創作活動を通じて過酷な体験をSNS上で告発したことを契機に、豪政府のボートピープル政策に対する国際的な抗議運動が展開されていった過程を検証した。非難当事者のアーティストや作家の創作活動が、難民/庇護希望者の存在を社会に知らしめ、彼らへの関心や共感を喚起する上で果たす役割についても考察した。以上を踏まえ、難民の脱「安全保障化」、さらには移民・難民との共生に向けた多文化社会の可能性と課題の把握を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

難民/庇護希望者の脱「安全保障化」の可能性を探るために、これまでの難民研究では必ずしも対象とされてこなかったアートや文学の領域に注目し、難民当事者を含むアーティストや作家による創作を通じた抗議活動とその影響について具体事例から考察した。政治学と文化研究ないしは文学の領域を架橋する学術的試みとして、今後の展開につながる成果を得ることができた。また、パンデミック下の世界的な移動規制によって見えてきた、越境を阻む様々な「境界」のあり様を問い直すことで、本研究をより深めることができた。その成果として、広い読者層に向けた『移動と境界 越境者からみるオーストラリア』（昭和堂、2023年）を刊行した。

研究成果の概要（英文）：This study examined the border politics aimed at preventing the stowaway of asylum seekers in Australia, focusing on historical background, border control, and the realities of offshore detention. It also verified the process by which an international protest movement against the Australian government's "boat people" policy developed, triggered by asylum seekers detained on Manus Island (Papua New Guinea) who posted their artwork and writing on social networking sites to convey their harsh experiences. The role played by the creative activities of artists and writers from non-refugee backgrounds in making the existence of refugees/asylum seekers known to society and arousing interest in and sympathy for them was also explored. Based on the above, this study attempted to understand the possibilities and challenges that a multicultural society presents for the de-"securitisation" of refugees and, moreover, for coexistence with migrants and refugees.

研究分野：多文化社会論

キーワード：ボートピープル 難民/庇護希望者 脱/安全保障化 境界/国境管理 国外難民収容 越境 難民アート 収容所文学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

移民・難民が国家の安全や社会秩序を脅かす存在と見なされ、国家安全保障の政策対象となる「安全保障化」と称される現象が世界的に顕在化している。多文化主義を掲げてきたオーストラリアにおいても例外ではない。本研究では、主として同国に密航船で到来する庇護希望者（ボートピープル）の「安全保障化」をめぐる諸相を踏まえつつ、それらに対抗する人びとの営為に着目し、これまで必ずしも研究対象とはされてこなかった脱「安全保障化」に向けた動きと可能性について、政治学的アプローチを超えた広い視座から学際的に考察する必要があると考えた。

2. 研究の目的

上記の背景と問題意識を踏まえつつ、オーストラリアを事例に、1) 密航船で到来する庇護申請者を含む移民・難民の「安全保障化」をめぐる諸相、2) こうした「安全保障化」に異議を唱え、また難民を支援する人びと（難民当事者を含むアーティストや文学者にも注目）による種々の活動とその影響、3) 密航ないしは越境、移住という現象における思想的意味や時代、社会との関係性、について考察を行う。それらを踏まえ、移民・難民の脱「安全保障化」に向けた可能性と課題をはじめ、政策言説だけでは捉えきれない多文化社会の実相を明かにし、さらには、よりグローバルな視野から排外主義が台頭する国際社会への示唆を引き出す。

3. 研究の方法

4名の研究者が、それぞれの専門分野の方法論に基づいて文献調査及び現地調査を行い、それらの成果を踏まえて議論を重ねた。

飯笹は、政治学、社会学、ボーダースタディーズ領域を中心に難民研究に関する文献を精査した。加えて、アート関連の人文系文献や視聴覚資料からの示唆を得つつ、シドニーの美術館や芸術祭において難民を表象する作品やそれらのメッセージ性についての調査と、難民支援に積極的に関わっている活動家やアーティストへの意見聴取を試みた。

鎌田は先行研究や豪官公庁が公開する報告書や統計資料、図書館および公文書館が所蔵する史料などを精査し、歴史的な視点も含めて豪の海洋政策と領域化の経緯を考察した。特に、海を生活圏として移動してきた人々が周縁化・「安全保障化」され、時に生活の糧を得るために難民の密航に関与してきた実態について文献・資料から検証を行った。

加藤は難民に関する文学作品を中心に文献調査を行った。その際、文学研究の枠を超えて、他の共同研究者が専門とする政治学、社会学、国際関係論、平和学の文献や方法論、知見から多くの示唆を得た。シドニーにおける調査では、資料の渉猟、および難民当事者が創作した作品の翻訳や出版の支援等を通じて難民を支える活動を実践してきた作家、研究者、活動家との面談を行い、彼（女）らの社会に対する発信の方法やその影響について意見交換した。

山岡は、オーストラリアの戦後の移民・難民政策が具体的に展開された場として、ボネギラ移民収容センターに着目し、現地調査を行った。ボネギラという境界空間を通して見たとき、移民をめぐるオーストラリア国家の公的イデオロギーと現実とのズレが明らかとなった。さらに、そこから浮上したホスト社会と移民集団間のアイデンティティ・ポリティクスをめぐる政治理論上の論点について、文献をもとに考察した。

4. 研究成果

(1) 移民・難民の「安全保障化」と「境界の政治」

・オーストラリアの安全保障政策は、特に「北からの脅威」に備えた国防政策と移民政策の二本柱によって支えられてきた。そうした安全保障政策では北部海域での領域管理は重要であり、海洋資源を保護し海域での人の移動／侵入を管理するために、境界の策定に注力してきた。また、排除する対象を選別するために、豪北部海域には多層かつ豪側への侵入が厳しい境界が作られたとともに、時には近接国家の領域にまで侵入する偏在的な境界も出現した。このような多様な境界の実相を明らかにするためには、オーストラリアでの海域管理の言説を分析するとともに、移動者の視点から「境界」の実態を描き出すことで、脱「安全保障化」の視座を提示する必要性があることを認識した。

・本研究課題が開始されると同時に、新型コロナの流行により、世界中で多くの国が出入国を制限し、事実上の国境閉鎖を行った。これにより現地調査の渡航ができなかった一方で、国際移動

の困難さを経験したこと、またこの間の世界的な境界管理をめぐる異例の動向を知ることにより、国境はじめ、人々を排除するための種々の「境界」の存在や意味について新たな気付きと視点を得ることができた。それらは、移民・難民の安全保障化に伴う「境界の政治」について考察を深める上で有益であった。

・コロナ禍で、一時的にホテルが感染対策による帰国者の隔離の場となり、変則的で拡張された「国境地帯 (borderland)」の一部として機能することとなった。注目すべきは、防疫のための隔離とは異なる目的で、ホテルはすでに多くの国で国境管理レジームに組み込まれていたということである。オーストラリアでは、ホテルが学校、軍の兵舎などとともに「代替収容施設」(alternative places of detention: APODs)として位置付けられ、コロナ禍以前より、非正規移民や難民を収容する場として、いわば「多形な (polymorphic)」国境の一部となっていたことなどが明らかとなった。

・豪当局によってボートピープルが移送、収容されてきたナウルやパプア・ニューギニアのマヌス島の海外難民収容施設もまた、変則的で拡張された「国境地帯」といえる(マヌス島の収容施設は2017年に閉鎖され、2021年に豪政府との協定が終了)。こうした豪政府の境界管理の最前線を南太平洋の小国が担うこととなった歴史的背景として、マヌス島に収容されたイラン出身のクルド人ベルフーズ・ブチャーニーによる著作『山よりほかに友はなし』(2018、邦訳2024)での洞察を踏まえ、2つの要因を指摘することができる。一つは、オーストラリアの植民地化の歴史において、国家安全保障を脅かすと見做された人びとを社会から隔離された見えない空間に監禁することが、社会的・政治的統制の手段として用いられてきたこと。もう一つは、両国ともオーストラリアとかつてコロニアルな関係を有していたことである。これらの二重のコロニアリズムが未だ残存しており、その上に台頭したネオ・コロニアリズムとも称される新たな状況が、現在のオーストラリアの海外収容政策を支えている。

(2) 脱「安全保障化」の可能性と課題

移民・難民の脱「安全保障化」につながり得る運動・活動の中で、特に近年、人びとの注目を引いてきたアーティストや作家による幅広い活動とその影響力について考察した。

① アートをめぐる動向と影響力

・まず、難民当事者による活動として、上述のブチャーニーと、同じくマヌス島に収容されたイラン出身のアリ・ドラニ(ペンネームは **Eaten Fish**) の創作を通じた抗議を挙げることができる。収容施設内の厳しい監視の目をかいくぐり、前者は映像や文学作品を、後者は漫画を創作することで収容の実態を SNS に告発した。それらは次第にオーストラリア内外のジャーナリストや作家、アーティスト、人権活動家などを動かし、ネット空間上で豪政府への抗議や収容者の解放を求める活動の展開に大きなうねりをもたらした。

こうした当事者による主体的な抗議活動は、国境管理の領域を混乱させ、既存の秩序やシステムに挑戦する「ノイズの主体 (Noisy-Subject)」(Ozguç 2020) *として、難民の脱「安全保障化」に向けた可能性を開く一方で、実質的な政策変更につなげるための課題については、彼らを支援するデジタル・アドボカシー活動の動向や影響についてのさらなる考察が必要である。

* Ozguç, Umut. 2020. "Borders, Detention, and the Disruptive Power of the Noisy-Subject," *International Political Sociology* 14: 77-93.

・上記の事例に加えて、難民当事者ではないアーティスト/アクティヴィストによる作品創作による問題提起や、芸術祭という場でのボイコット運動など、アートを手段や場として展開する種々の抗議活動がオーストラリアでは比較的活発に行われてきた。その背景には、同国におけるアムズレンクスの原則(政府は金を出すか芸術の内容には介入しない)が機能していることを指摘することができる。このことは、他国との比較研究において留意すべき点である。

課題としては、アートを介した抗議活動はインパクトを有するものの、ややもすると新鮮味を失い、単に一過性の消費対象にとどまり得ること、などが挙げられよう。他方で、困難を抱えた難民のエンパワーメントに資する参加型のアート活動の重要性は、シドニーにおける「難民アート・プロジェクト」の活動実績からもうかがえる。

② 文学をめぐる動向と影響力

・難民が当事者として実情を描き、発信する文学作品は、作品の芸術的意義だけでなくアクティヴィズム的な影響力を持つことが明らかになった。例としてベフルーズ・ブチャーニーの書籍『山よりほかに友はなし』(2018、邦訳2024)及び映像作品 *Chauka Please Tell Us the Time* (2017)が、「国籍」や「境界」の意味への問い直しと、それらの概念の揺らぎを社会のマジョリティ側にもたらしたことが挙げられる。さらに、彼の創作活動を支え、社会との橋渡しをする翻訳者といった「仲介者」の存在が不可欠であることも明らかになった。

・移民や難民当事者による人種差別への文学的対抗言説について、Winnie Dunn et. al. eds.,

Racism: Stories on Fear, Hate & Bigotry (2021) 及び Maxine Beneba Clarke, *The Hate Race: A Memoir* (2016) の 2 つの作品を対象に分析を行った。両者を特徴づけるアクティヴィズムについて、先住民作家 Leah Purcell の小説と映像作品の内容とも比較しつつ精査し、マイノリティによる文学作品や映像が国内外での「人間の安全保障」概念に与する可能性と意義を確認した。

・他方、社会のマジョリティの側における「心の境界」を問う試みとして、難民を描いた C. Atkins、Z. Fraillon、J. French らのヤングアダルト小説や児童文学の重要性を認識することができた。これらの作品は学校図書に指定されており、若年層が文学作品を通して難民という「他者」の存在を認識するための啓発活動ともなり得る。難民とマジョリティを仲介する書物として、文学作品としてのクオリティーを保ちつつ、難民の「当事者」になり得ない読者に、「当事者性」への共感を喚起する試みであるといえる。なお、「当事者性」をどのように概念化、理論化するののかについては、今後の課題である。

(3) ナショナル・アイデンティティと境界

・オーストラリア国家にとっての境界という問題について、ナショナル・アイデンティティの観点から考察した。白豪主義から多文化主義への転換というオーストラリアの公的な自己像は、必ずしも境界を潜り抜けて同国にやってきた移民・難民たち自身の物語とは一致しない。本研究では、ボネギラ移民収容センターという境界空間の調査を通じて、オーストラリアのナショナル・アイデンティティが第二次世界大戦後に幾重にも変容していく過程を明らかにした。

・ボネギラという場の考察が、政治理論上の重要な視点の変換をもたらすこととなった。これまでの移民や難民の受け入れについて論じる政治理論においては、受け入れ側社会のマジョリティのあり方がつねに問題化されてきたと言える。移民や難民を排斥する閉鎖的な社会状況であれ、その反対に他者に寛容な多文化主義社会であれ、社会を形作る主導権は当然のようにマジョリティの側に想定されてきた。しかし、ボネギラの歴史が示唆するのは、社会を形作る上で、従来受け身の立場に置かれてきたマイノリティが果たす役割の重要性である。「マイノリティがマジョリティを寛容する」ことによって、オーストラリア社会に安定と豊かさがもたらされているのではないか、という暫定的な仮説に本研究では辿り着いた。この点は、今後の研究課題としてさらに深めていく必要がある。

なお、上記成果の一部として、以下の 2 冊の書籍を刊行した。

- ・飯笹佐代子・鎌田真弓編『移動と境界——越境者からみるオーストラリア』昭和堂、2024 年 (分担執筆：加藤めぐみ・山岡健次郎)
- ・吉原直樹・飯笹佐代子・山岡健次郎編『モビリティーズの社会学』有斐閣、2024 年

また、2024 年 6 月 16 日、松山大学にて開催されたオーストラリア学会・全国研究大会においてシンポジウム「コロナ禍で表出したボーダーとアイデンティティ」を鎌田と飯笹が企画し、成果の一部を発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 加藤めぐみ	4. 巻 39
2. 論文標題 書評：Nicholas Birns and Louis Klee eds., The Cambridge Companion to the Australian Novel, Cambridge University Press, 2023 クリスティン・パイパー 『暗闇の後に 豪州ラプデー収容所の日本人医師』北條正司訳 花伝社 2023年 (Christine Piper, After Darkness, Allen & Unwin, 2014)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 南半球評論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 山岡健次郎	4. 巻 3629
2. 論文標題 書評：セイラ・ベンハビブ 『逆境の中の尊厳概念－困難な時代の人権』（法政大学出版会、2023年）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 飯笹佐代子	4. 巻 14(2)
2. 論文標題 マヌス島からの抵抗 収容されたクルド人難民ベルフーズ・ブーチャーニの創作活動とその影響	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青山総合文化政策学	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34321/22793	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 鎌田真弓	4. 巻 36
2. 論文標題 村松商会 (J & T Muramats) の帳簿を読む－西豪州コサクにおけるビジネスと日本人真珠貝労働者のエスノグラフィー (研究ノート)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 オーストラリア研究	6. 最初と最後の頁 37-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20764/asaj.36.0_37	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kamada, Mayumi	4. 巻 67
2. 論文標題 An Ethnographic Study of the J & T Muramats Account Books: Its Trading and Pearling Business in Cossack, Western Australia	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 NUCB Journal of Economics, Management and Humanities	6. 最初と最後の頁 13-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤 めぐみ	4. 巻 37
2. 論文標題 書評: 人種差別を語ること Winnie Dunn, Stephen Pham & Phoebe Grainer eds., Racism: Stories on fear, hate & bigotry, Sweatshop Literacy Movement Inc., 2021; Maxine Beneba Clarke, The Hate Race: A Memoir, Hachette Australia, 2016	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 南半球評論	6. 最初と最後の頁 66 ~ 70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20743/anzshr.37.1_66	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯笹佐代子	4. 巻 12 (2)
2. 論文標題 難民危機と現代アート アイ・ウェイウェイの作品を中心に (研究ノート)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 青山総合文化政策学	6. 最初と最後の頁 137-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34321/22228	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤めぐみ	4. 巻 第36号
2. 論文標題 「越境する者とされる者 ベフルーズ・ブーチャーニ 『山々よりほかに友はない』とフェリシティ・カスターニャ 『ノー・モア・ポート』 にみる「境界」への考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『南半球評論』	6. 最初と最後の頁 23 - 40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20743/anzshr.36.0_23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 飯笹佐代子
2. 発表標題 マヌス島からの抵抗 オーストラリアの国外難民収容政策と収容されたアーティストらの抗議活動
3. 学会等名 日本国際政治学会2022年度研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鎌田真弓
2. 発表標題 オーストラリアで働いた日本人の記録：瀧本庄太郎・藤田健児・村村松治郎・榊原しげ乃
3. 学会等名 オーストラリア学会2022年度全国研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山岡健次郎
2. 発表標題 「地表の権利」を行使するーグローバルな難民移動が作り出す境界領域ー
3. 学会等名 社会思想史学会第47回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山岡健次郎
2. 発表標題 難民との友情ー難民保護という規範を問い直す
3. 学会等名 日本平和学会 春季研究大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯笹佐代子
2. 発表標題 「移民の安全保障化」とカナダ
3. 学会等名 日本カナダ学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 飯笹佐代子・鎌田真弓 編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 368
3. 書名 『移動と境界 越境者からみるオーストラリア』（編著：飯笹佐代子「第8章 伸び縮みする排除の境界 翻弄されるボートピープル」・「コラム10 マヌス島からの発信 フェンスを超えるアート」・「第16章 パンデミック禍のオーストラリアで立ち現れた「境界」の諸相」ほか）	

1. 著者名 飯笹佐代子・鎌田真弓 編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 368
3. 書名 『移動と境界 越境者からみるオーストラリア』（編著：鎌田真弓「第2章 真珠貝漁と出稼ぎ労働者 オーストラリアの海に渡った日本人」・「コラム3 村松治郎 英国臣民として生きた日本人企業家」・「第13章 海の領域化が生む「越境者」たち」）	

1. 著者名 飯笹佐代子・鎌田真弓 編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 368
3. 書名 『移動と境界 越境者からみるオーストラリア』（分担執筆：加藤めぐみ「第10章 難民による文学的応答 ベプルーズ・ブチャーニーの創作活動を中心に」・「コラム12 『ノー・モア・ボート』からみる移民の「境界」」・「第14章 オーストラリアの児童・ヤングアダルト文学にみる心の境界の克服」ほか）	

1. 著者名 飯笹佐代子・鎌田真弓 編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 368
3. 書名 『移動と境界 越境者からみるオーストラリア』（分担執筆：山岡健次郎「第12章 移民たちのボネギラ ナショナル・アイデンティティの境界を訪ねて」）	

1. 著者名 吉原直樹・飯笹佐代子・山岡健次郎 編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 230
3. 書名 『モビリティーズの社会学』（編著：飯笹佐代子「第9章 難民を翻弄するオーストラリアの境界政治 収容の海外移転・新植民地主義・新自由主義」）	

1. 著者名 吉原直樹・飯笹佐代子・山岡健次郎 編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 230
3. 書名 『モビリティーズの社会学』（編著：山岡健次郎「第4章 モダニティの両義性と複数性」）	

1. 著者名 宮崎里司・佐和田敬司編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 オセアニア出版	5. 総ページ数 187
3. 書名 『コロナ禍を乗り越え未来に向かうオーストラリア』（分担執筆：加藤めぐみ「二一世紀の課題に回答するマイノリティ作家の文学ーリア・パーセルの「家畜追いの妻」アダプテーションを中心にー」）	

1. 著者名 日本ケベック学会編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 384
3. 書名 『ケベックを知るための56章』【第2版】（分担執筆：飯笹佐代子「インターカルチュラリズム（間文化主義）」・「多様な宗教文化との共存に向けて」・「ヴェール論争」）	

1. 著者名 鎌田真弓編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 320
3. 書名 『大学的 オーストラリアガイドーこだわりの歩き方』（分担執筆：飯笹佐代子「多文化の街 - シドニー」、コラム「現代アートの祭典 - シドニー・ビエンナーレ」）	

1. 著者名 鎌田真弓編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 320
3. 書名 『大学的 オーストラリアガイドーこだわりの歩き方』（編著：「序章」、コラム「戦争を語り継ぐ 戦争記念碑とアンザック・デー」、「連邦の象徴 キャンベラ」	

1. 著者名 鎌田真弓編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 320
3. 書名 『大学的 オーストラリアガイドーこだわりの歩き方』（分担執筆：加藤めぐみ「文学の森を歩く オーストラリアの多様な作家たち」、コラム「オーストラリア文学の中の日本」）	

1. 著者名 日本カナダ学会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 392
3. 書名 『現代カナダを知るための60章』（分担執筆：飯笹佐代子「多文化主義の今」・「宗教的多様性とケベック」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>・飯笹佐代子「ムスリムのヴェールをめぐる何が起きているのか - カナダとオーストラリアを中心に」青山コミュニティラボ研究プロジェクト報告書 https://www.mediaxoayama.net/login/wp-content/uploads/2021/04/iizasa.pdf</p> <p>・鎌田真弓「村松治郎とそのファミリー：日豪を繋いだ家族の肖像」（日英併記） https://www.nucba.ac.jp/archives/189/202403/NUCB-K-23101.pdf Kamada, Mayumi, 'Jiro Muramats and his Family' https://www.nucba.ac.jp/archives/189/202403/NUCB-K-23101.pdf</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鎌田 真弓 (Kamada Mayumi) (20259344)	名古屋商科大学・国際学部・教授 (33914)	
研究分担者	加藤 めぐみ (Kato Megumi) (30247168)	明星大学・人文学部・教授 (32685)	
研究分担者	山岡 健次郎 (Yamaoka Kenjiro) (10584394)	群馬県立女子大学・国際コミュニケーション学部・准教授 (22302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------